

ポレポレ 倶楽部 通信

発行日 2012年 2月 No.21

発行責任者 高田 次雄

久留米市安武町武島468-2

「出会いの場 ポレポレ」内

Te l 0942-27-2039

Fax 0942-27-2086

「絆」と「希望」を求めて

昨年3月11日に起きた、未曾有の東日本大震災後、スタッフを含めポレポレ関係者が被災地に行ったり、被災された方々をポレポレ祭りにお招きしたりしました。その中で、人のつながりは、絆や希望につながるものにしなければという事を学びました。

「ポレポレ祭り」に石巻から参加していただいた木村さんから、お礼のメールが届きました。

石巻も瓦礫はだいぶ撤去されてはいるものの「復興」という言葉はまだまだ先の話だろうと思います。しかし、前を向いて、この大好きな石巻をよりよい街にするためにがんばってまいります。

お願いします、石巻を、被災地を忘れないで下さい。そして、機会があったら是非、石巻、被災地に来て下さい。ここに暮らす人々の姿を見ていただくだけで結構です。

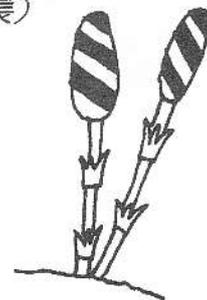
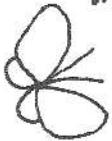
石巻の人々は、またどこか別の所でこのような災害があった時には、いの一歩に駆けつけると心に決めている人が大多数です。常に「感謝」の気持ちを持つようになりました。東北人は、なかなか自分の気持ちを素直に表すことが苦手なもので、他の地域の方には、感じ取れないかもしれませんが、間違いなくそう思っています。

石巻茶色い焼きそばアカデミー 木村さんより 2011/12

目

次

- 2P 障がい者が人をつなぐ (拓く 成人式)
- 3P 10年の付き合いがあってこそ (ポレポレ倶楽部 新年会)
- 4・5P 1月からオープン (ケアハウス こりんずハウス 御井町の家)
- 6P 一人ひとりの健康と豊かさをみんなで願う (左義長)
- 7P 今、私たちにできること (備蓄)
- 8・9P 笑顔のうらの思いを知る (被災地に入って)
- 10P 第10回 ポレポレ祭り (絆をひろめよう)



障がい者が人をつなぐ

拓く 成人式 (1月7日)

今年は9名の新成人を迎えました。みなさん、地域の保育園や小学校へ通ってきました。中には高等部の時から親元を離れ、地域の中で暮らしてきた方もいます。地域の中でしっかり根付いてきたからこそ、恩師や地域の方、ボランティアで関わった方、保護者、スタッフなど、175名もの方が参加して下さいと思っています。みなさんからお祝いの言葉をいただき、地域をつないでいるのは親でも支援者でもなく、メンバー一人ひとりなのだ改めて感じました。

筋ジストロフィー（デュシェンヌ型）で、夢工房でがんばっている床島圭さんの母、千恵さん

20歳の成人式、親として共に過ごした20年、かけがえのない大切な命。

一方で親として祝ってやる事が出来ずに、深い悲しみと無念さに耐えながらこの日を迎えられた方もおられるでしょう。そんな複雑な思いの中で成人式を迎えた我が子。9名の新成人のためにお祝いの会を開いて下さってありがとうございました。

当日の子ども達、前に出ているだけできっと精一杯なのでしょう。嬉しさの表現は一人ひとり違うけれど、自分達のために祝って下さっていることがやっぱり嬉しいのですね。一人ひとりに選んで下さった記念品や花束を手に、おいしいお弁当もいただけ、ありがたく思いました。

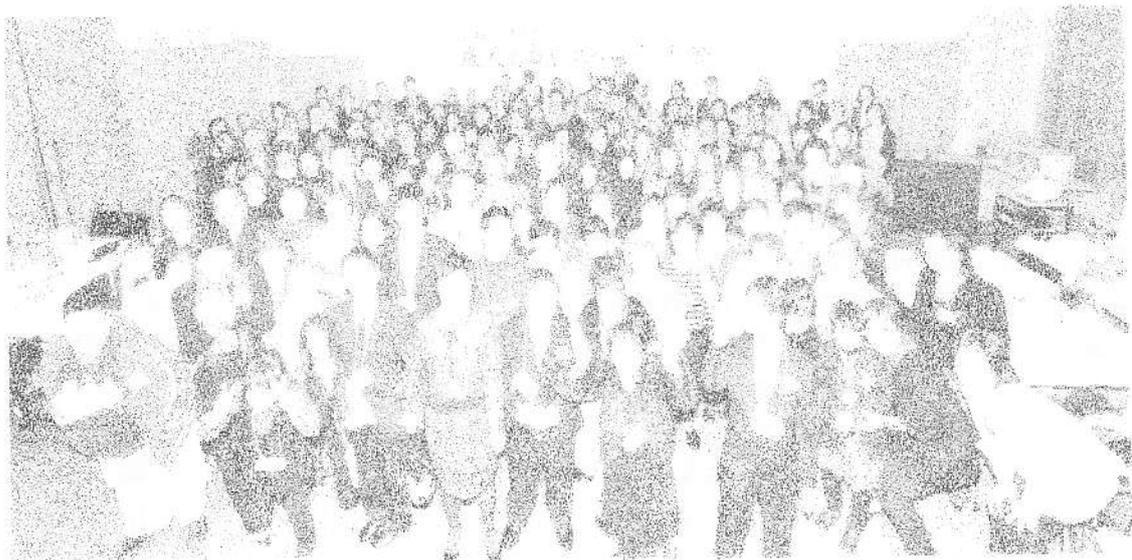
思い出がギュッと詰まった土地から未知の生活へと歩み出して2年、新たな出会いの中での成人式でした。応援をして下さる方々の祝福のまなざしを受けている姿に嬉しさをかみしめました。親子ともに特別な記念日になりました。

今日の日の心遣いを忘れずに、一日一日を大切に生きていきたいと思います。

学齢時より宿泊体験を積み、高等部卒業と同時にケアホームで暮らしている友成有紀さん「成人のお祝い」を開いていただきありがとうございました。とても楽しかったです。

毎日、「あんだんて」で洗濯や掃除をしています。世話人さん達がおいしいご飯を作ってくれたり、おもしろい話をして下さったりします。困った時は、優しく助けてもらっています。「あんだんて」は、とても楽しいです。

私は今、「障害者雇用支援センター」で、就職を目指してがんばっています。就職したら家族やみんなと一緒に旅行をしたいと思います。苦しいけどがんばります。応援して下さい。



10年の付き合いがあつてこそ

ポレポレ倶楽部新年会

1月18日(水)は恒例の新年会。今年をはじめ、地域の福寿会会長さん、まちづくり振興会副会長さん、自治会長さん、女性防火倶楽部の会長さんをはじめ、多くの地域の役員さんたちに参加していただきました。お世話になっている地域の役員さんたちが、会費制の新年会においていただいたことは光栄であり、とても嬉しいことでした。

この新年会は7年前、ポレポレ倶楽部の会員同士の親睦を深めるために始められたそうです。大丸寿司の主人に、会場で握りずしを握ってもらったのが最初の年。それ以来、毎年、美味しいもの、サプライズメニューが考えられました。今年は、生き作り、温泉豆腐鍋、菜の花ごはん、豪華なフルーツをご用意。サプライズメニューは大阪名物の串あげ(えび、さがり、アスパラ、うすら等)12種類、1200本です。アツアツの串カツをみなさまに召し上がってもらおうと、フライヤーを会場の中心に置いて、斉藤先輩が3時間かけて揚げました。

美味しい料理を囲むと、踊ったり歌ったりして自然とその場が和み、他人同士でも、打ち解けていきます。美味しい料理と酒の力はすごいと思いました。僕は、来年の料理と酒、サプライズメニューをひそかに考えています。お楽しみに。

3年前に『地域食堂』を始めたあたりから、三原さんが地域の方へ「おいでおいで」と声かけをして下さったおかげで、新年会への参加者が増えてきました。昨年からはポレポレのお母さん方や職員も『地域食堂』に関わるようになり、さらに顔なじみが増えました。ちょうどみなさんの名前を覚えたいと思っていた時でしたので、新年会で「人名ビンゴゲーム」を行い、大好評に終わりました。

顔と名前が一致し、今後は「かきね」がもっと低くなり、さらにお誘いしやすくなると思います。ポレポレ11年目、地域の方たちとポレポレ関係者が名前を呼び合い、助け合っていけるといいなあと思っています。
(スタッフ 前田 力哉)



みんなで歌ったり踊ったり・・・



斉藤先輩、串あげに奮闘中・・・

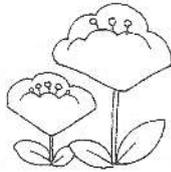
1月からオープン

「こりんずハウス」 「御井町の家」

「社会福祉法人 拓く」にとっては、7つ目、8つ目となるケアホームが、今年1月と2月に出来ました。それぞれのケアホームは、その校区の人たちと丁寧に人間関係をつくりながら成熟していきます。

新しいケアホーム『こりんずハウス』と『御井町の家』は、中心になるスタッフの想いや個性が出ています。一人ひとりが違うように、ケアホームも一つひとつ違う個性豊かな、そして地域福祉の拠点となっていくような、そんなケアホームづくりを目指しています。

思い切り楽しいことを



コーディネーター 今村 由子

久留米市役所徒歩2分『こりんずハウス』は2月1日にオープンしました。定員6名、エレベーター無しの3階と4階ということで、入居メンバーはおのずと限られてしまいます。3階に女子2名、4階に男子4名でスタート。不動産広告的にいうと、『バス停徒歩3分、郵便局、歯科、駄菓子屋隣接、コンビニ、レストラン近し!』。生活するのに超便利な所にあります。この立地条件をいかしたシティライフを楽しみたいところです。

先日女子メンバー2人、バス停からの帰路、珍しい人に遭遇。「うわぁーっ！」思わず大声をあげてしまいました。おかげでニッコリ記念撮影、河童のソックリさん(写真参照)でした。びっくり体験です。

高等部3年生のF君は、本町から特別支援学校まで路線バスに一人で乗って登校します。帰りは、なんと徒歩で「こりんず」に帰ってきます。本人曰く「アメニモマケズ、カゼニモマケズ・・・」と歩く姿勢に、何か哲学的なものさえ感じ、生きる姿勢を教えられている毎日です。

これからも、新たな体験・発見を楽しみたい、街なかケアハウス「こりんず」です。『こりんずハウス』は毎日毎日、楽しいことが盛りだくさんです。

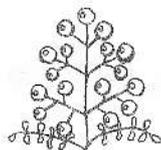


宿泊体験を重ねて、地域で暮らす

『こりんずハウス』へ入居した男子は、これまで、毎月宿泊体験を行ってきた仲間達です。親達は子どもが小さい頃から、地域で暮らすことを目指して意識を変えてきました。これからは、地域の人と力を合わせて、人生を切り拓いていって欲しいと思います。

(スタッフ 安倍 弥生)

笑顔でつながる



コーディネーター 福田 美紀

1月9日、月曜日。「ケアホーム 御井町の家」が開所しました。定員4名の小さなケアホームです。日中は地域にある夢工房（FOODS CAFE YUME）に通っている2名の方たちも利用されています。

私自身は、去年の11月より関わらせていただいておりますが、「地域の中で生きていく」ということはどういうことか？と考えながらの毎日です。

私は、150名入居という入所施設で12年の勤務を経験してきました。施設での暮らしに関わる中で、ご本人さんの思いはどこにあるのだろう？という気持ちがありました。決められたスケジュールで利用者の方に動いてもらうような日々の暮らしの中では、一人ひとりの思いをくみ取ることがなかなかできず……。

ここで、何から始めて良いのか分かりませんが、まずは、メンバー一人ひとりが我が家のように自分のリズムでゆっくり過ごせる場を一緒に作れたらいいな。そこから笑顔が引き出せていけたらいいな……と思っています。

そして、この町に住む皆さんが「ちょっと寄って行こうかな。」と気軽に立ち寄れる場作りを考えています。と言うのも地域の方々に挨拶に回らせていただいた際、高齢者の単身世帯や障がいを抱えた方もいらっしゃいました。そんな方々が集まってお茶会の場として使っていただいたり、ご飯を作って一緒に食べたりと、笑顔でつながれる場にできればどんなに楽しいでしょう。そんな場を目指していきますので、よろしくをお願いします。



一人ひとりの健康と豊かさをみんなで願う (左義長 1月15日)

僕は高校卒業後、ポレポレに就職し、パンづくりをして、今年で4年目になります。普段は息つく暇なく仕事をしているだけに、地域の人たちに包まれると、ほっとします。3000人が参加する大きなお祭り、「ポレポレ祭り」も地域をあげて応援してもらい、とても心強いです。地域のおばちゃんやおじちゃんが、よくパンを買いに来て話して帰られます。すると、パンづくりの意欲もわくし、本当にありがたいことだと思っています。

そんな折、左儀長の行事のお誘いを受けました。いつもお世話になっている地域の方からのお誘いでしたので、「行きます」とすぐに返事をしました。

しかし、「左義長」(さぎっちょ)ってなんだろう。実は、僕は「左義長」の経験がありません。調べたら、その地区に住む住民の「無病息災」、「五穀豊穡」を願った行事でした。

はじめての経験ですので、わくわくした気持ちで小学校に行ってみると、安武小学校の子どもと親、僕たちポレポレ関係者を含めて350人が集まっていました。

グラウンドを見てみると竹やわらで組まれた、大きな「左義長」が作られています。それぞれがもってきた正月飾りや書き初めで書いた半紙を投げ入れ、火が付けられました。火はジワジワと下から上へ、だんだんと火の勢が強くなり、煙が出てきました。その煙を身体に浴びると一年の病を取り除くといわれ、小さい子どもからお年寄りまで浴びていました。

地域全体で「一人ひとりの健康や豊かさをみんなで願う」ことを繰り返していくと、地域の結束も高まるのだろうなあと思いました。

まちづくり振興会の古賀会長さんは、実は「お互いに助け合えるような街に」「日本の伝統行事を次時代の人に伝承したい」という強い思いで、今回、安武小学校のPTAや地域のいろいろな団体に声をかけられ、企画されたということです。ポレポレもその実行委員に入りました。竹切りや竹組には参加できませんでしたが、片付けの部分(テントたたみ、灰をポレポレ農園に運ぶ等)では、僕たちポレポレの若い力が発揮できました。来年度はもっと主体的に関わろうと思います。僕たち若者にもっと地域の仕事を振って下さい。

(スタッフ 小川 真太郎)



今私たちにできること

昨年、3月11日起きた東北大震災では、日本中が大きな衝撃をうけました。来月で震災発生から1年となりますが、今でも私たちに何ができるのかを考え続けています。

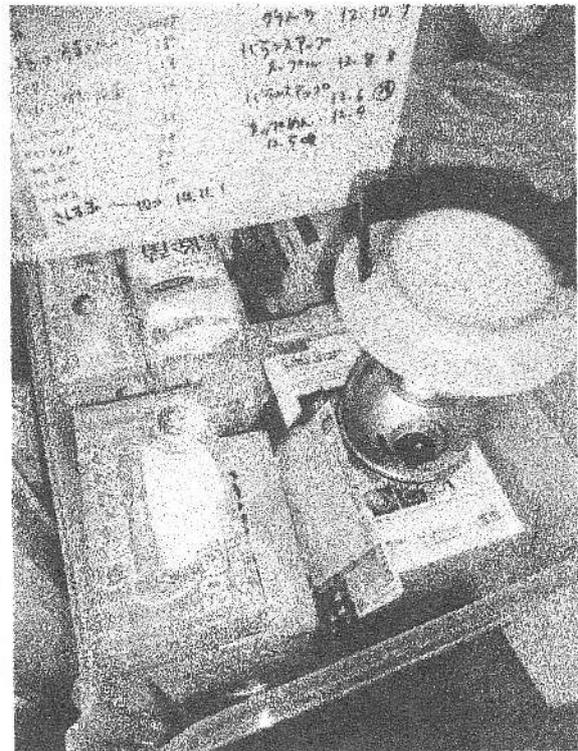
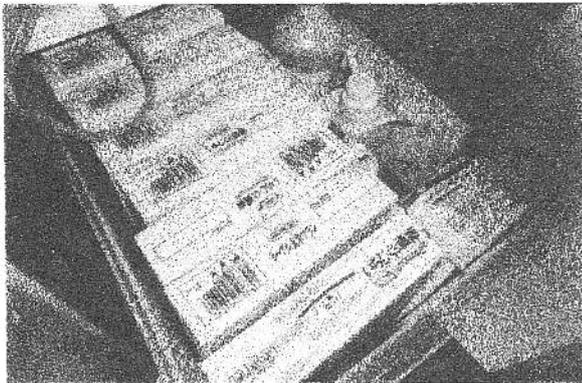
当法人には、事業所をはじめ8箇所のケアホームが久留米市に点在しています。いつ、どこで、震災が起きてもおかしくありません。以前から、「もし何か起ったら、備蓄が必要だ」という話が出ていましたが、忙しい日々の中で、後回しにしてきました。

そんな中、私は2月初旬から被災地に行く機会を得て、被災の状況や被災された方の声を聞くことができました。「震災当日に津波に流され、泥水で濡れた衣服で2週間を過ごした」、「以前から備蓄をしようと考えていたけれど、実行には移せていなかった。そんな時に震災が起きて、すべての物が流された時、人の命をまもるために備蓄をやっていたら、強く感じた」、「備蓄をすることで救える命がどんなにあったか」などと聞いた時、私は言葉にならない想いでした。

被災地に行ってみて、私たちに出来ることは、今回の震災を受けて同じ過ちを繰り返さないことだと考えました。「いつかやる」ではなく、「今やれる事をおさなりにせず、心をこめてしっかりやる」それが本当に大切だと感じて、全部のケアホームに備蓄することを実施しました。また、自分たちのケアホームの入居者だけでなく、地域の人の方まで備蓄するようにしました。

まだまだ、災害への備えは始まったばかりです。備蓄だけではなく、災害時に入居者を安全に避難させるにはどうするか、地域の人と考えていきたいと思います。

(スタッフ 児玉 元気)



備蓄した物・・・缶詰、レトルト食品、マスク、消毒液
トイレットペーパー、ランプ等々

笑顔のうらの思いを知る

—— 被災地 に入 って ——

自分の目標 (1/31-2/4)

北海道に住み、筋ジストロフィーを患う車椅子生活の竹田さんに、東北でお会いしました。竹田さんは、震災後、すぐに被災地に入り、現在までに延べ1万4千件、困った人に移送サービスを提供した方です。そんなにすごいことをしているのに、「なぜ、支援ができたか」という問いに「何となく」と答えられました。僕はその言葉に衝撃を覚えました。

「震災が起こった、困っている人がいる、それでは行こう」
それが、竹田さんにとって自然な行動だったのだらうと思います。

翌日、追波川仮設住宅を訪れました。ポレポレの職員が震災後支援したこともあり、とても歓迎していただきました。6人の方に、震災当時から現在までの思いを聞きました。「震災当時、雄勝に住んでいたが、壊滅的な被害を受け、雄勝には戻る理由もないし、戻らない」「戻る人も、職業柄、しかたなく戻っている」という話でした。

次に、宮城県石巻市のビッグバンに行き、大川小学校でお孫さんを亡くされた方の話を聞きました。「あの時、すぐに迎えに行っていれば、私が代わりに死んでいれば」という言葉に、胸にこみ上げるものがありました。

今回の研修で自分が何かをしようという明確なビジョンを持つことはできませんでした。しかし、困っている人がいたら、すぐに駆けつけるのが当然と思える人間になる、という目標を持つことができました。
(スタッフ 前田 力哉)

鈴木さんの顔 (2/10-2/12)

宮城県石巻市の河北の避難所『ビッグバン』の職員で、震災の当初から避難所の運営をされている鈴木さんの車に乗って、石巻を案内していただきました。鈴木さんは自分の家を流され、全てを失ったそうです。ところが、大変お世話になった上に、たくさんのおみやげをいただきました。

「どうして、被災をしていない僕達のためにお金を使うのだらう」と、僕には今でも分かりません。でも、被災地という言葉を知ると鈴木さんの顔が浮かぶようになりました。

被災地に行ったことで、被災地のことや、震災のこと、そして原発のことを意識するようになりましたし、被災地の報道番組などは、特に真剣に見るようになりました。

今後どこかで地震がおきたら、駆けつけられるかと言うと、正直自信はありません。でも、鈴木さんがまた被災したら、鈴木さんの顔がすぐに浮かび、じっとはしてはいられないと思います。
(スタッフ 小川 真太郎)

南相馬市（福島県）石神第一小学校にパンをおくりました（10/24-10/27）

『ポレポレ祭り』の一環で、地元の小学生と一緒に、東北復興支援についてできることを考えました。大善寺小学校の6年生の提案で、「子どもパン屋さん」で作るパンを、福島県の南相馬市にある、石神第一小学校へ送ることにしました。

パンには、一個ずつメッセージカードをつけ、ビデオレターも作成し、自分たちの思いを届けました。

パンを送ったすぐ後に、私は福島へ行き、石神第一小学校の子ども達に会ってきました。石神第一小学校は、原発事故の影響を受け、3月12日から避難勧告が出て、4月21日まで臨時休校となった学校です。その後少しずつ住民が南相馬にもどりはじめ、4月22日から学校が始まりました。ところが放射線量が高く、すぐに閉鎖。子ども達は、毎日スクールバスで20分かかって、よその地区にある、前川原体育館内のパティーションで仕切られた教室に通うことになったのです。

今回の訪問で「福島から伝えたいこと」という歌を聞かせていただきました。5年生の子が作詞をし、それに若い先生が曲をつけた歌です。「世界中の人たちが 僕たちを想ってくれた 何かできないかって 心を痛めてくれた 人ってやさしいね 人ってあったかいね 人って泣けるんだね 人って強いんだね」と4年生の子ども達が元気に歌ってくれました。その明るい歌声に、みんな涙しました。

弱さに負けそうになった時、それを救ってくれるのは人だということを、子ども達は身をもって知ったのでしょう。しかし、見えない恐怖となる放射能のことがあり、これからの毎日に不安があるだけに、考え込んでしまいました。

昨年の11月21日に仮設校舎が建って、やっと教室らしいところで勉強できるようになったそうです。そして、2月27日から、待ち望んだ石神第一小学校で勉強ができるという話です。今、保護者が一生懸命、周辺地区の木を伐採し、洗浄しているそうです。

子ども達の笑顔の裏にはいろんな思いがあるのかもしれませんが、私たちは純粋に、この笑顔を守らなくてはと感じました。（スタッフ 鹿子島 功子）



石神第一小学校の子どもたち

絆をひろめよう

地域の人と一緒に作りあげようと始めた『ポレポレ祭り』は、2011年で10年目を迎えました。

昨年3月11日に、東日本大震災が起これ、今回のポレポレ祭りでは何ができるのか、何度も話し合いを重ね、「絆をひろめよう」というテーマになりました。

ポレポレは、震災後、スタッフが被災地へ支援に何度も行っています。その縁あって、今回の祭りへは、福島県南相馬市の精神障がい者の施設「NPO法人あさがお」の方達や、福島県浪江町の地域活動支援センターの「コーヒータイム」の方達、また被災地で知り合った方達が駆けつけて下さいました。そしてみんなで祭りを盛り上げて、より絆が深まったように思います。

「コーヒータイム」の方は原発から20キロ圏内であって、着の身着のまま避難され、2店舗あったカフェも閉鎖されたという話をされました。そして「多くの尊い命が奪われたこと」、「目に見えない放射能の危険と風評被害があること」など多くの人に伝えたい、忘れないでほしいという思いで来られました。

B級ご当地グルメで人気の『石巻焼そば』も出店していただきました。また東北物産店では、地域の人や来場者にたくさん買っていただきました。

例年雨にあっているお祭り、今年も一時ひやっとしましたが、東北の方、久留米の私たちの思いが届き、例年以上の人出で賑わいました。

このお祭りで私達は、東北の大震災のことを身近なこととして受け止め、忘れないために何ができるのかを考え、一人ひとりが行動につなげることが大切ではないかと感じました。

被災地から駆けつけてきて下さった方々、これまでこのお祭りを支援していただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

(スタッフ 野上 真紀子)

